

令和 8 年度 井原散布地発掘調査 現地説明会資料

- 調査主体 : 丹波市教育委員会 社会教育・文化財課
- 調査目的 : 作業場新築工事に伴う発掘調査
- 調査面積 : 約 200 m²
- 調査期間 : 令和 8 年 6 月 1 日～ (調査継続中)
- 現地説明会 : 令和 8 年 6 月 28 日



【井原散布地について】

井原散布地は奈良時代の散布地（土器などの遺物が多く見つかった場所）として知られている遺跡で、過去の調査では、奈良時代の丸・平瓦が多く出土しています。また、1点だけですが加古川市にある野口廃寺と同範の軒丸瓦が出土しており、加古川を通じて播磨地域との交流があったことを証明している遺跡でもあります。この他にも、同時代の柱そのものや多くの木製品が出土しています。

この井原散布地周辺には、「堂の前」「釈迦前」「法^{きょう}ゲン経」「釈迦ノ本」といった寺院に関連すると想定される地名が多くあるため、古代の寺院跡が想定されている場所でもあります。

また、平城京の井戸からは、氷上郡井原郷から赤米 5 斗を貢納したと書かれた木簡が出土していることから、奈良時代には郷（奈良時代に制定された、一番小さい行政区画の名称）があったことが分かっています。

【周辺の発掘調査成果について】

- ① 今回の調査地より東の「法^{ひとがた}ゲン経散布地」での調査では、人形（木の板を人の形に加工したもの。儀式で形代として災厄を移して川や溝の水に流したものと考えられている）が出土しており、寺院跡・官衙^{かんが}（役所）などの井原郷の中心的な施設があったことが想定されています。
- ② 今回の調査地の南側にある「高良田遺跡^{こうらだ}」では、弥生時代の土器や、古墳時代～飛鳥時代の土器や建物跡・溝が見つっています。

【今回の調査成果について】

（柱穴と竪穴住居跡）

調査地の北東部で、柱が建っていたと思われる坑を複数確認しました。また、その柱穴を壊す形で作られた竪穴住居と思われる落ち込みを確認しています。

(川)

柱穴や竪穴住居跡のすぐ西側から黄色い地面が見えなくなり、暗褐色の砂が見えるようになり、その砂の層が見える高さも、徐々に低くなっていきます。このことから、自然のものか人工的なものかは不明ですが、川か大溝が存在しているようです。この川の幅を知るため、柱穴や竪穴住居跡の見つかった高さまで西側を掘ってみました。反対側に黄色い地面は確認できませんでした。このことから、この川が井原郷の寺院跡や官衙の建物跡の範囲の西端となっているのかもしれません。

(溝)

調査地の東側で、溝を確認しました。溝の中からは飛鳥時代～奈良時代の土器や瓦の破片が見つかったことから、奈良時代までは使われていた溝のようです。

(整地層)

今回の調査では、全ての範囲で厚い整地層（盛土）を確認しました。この整地層には、飛鳥時代～奈良時代の瓦や土器の破片が多く含まれていた他、わずかに弥生時代や古墳時代の土器も含まれていました。この整地層は、今回確認した川をも埋めて、同じ高さまで土を盛っていることから、寺院や官衙が使われなくなって以降に、次の土地利用のために大規模な造成工事をしたことが明らかになりました。

元々、調査地周辺では古代の瓦が多く採集されていました。今回の調査で、その理由は田畑や家を作る時に、この整地層が掘り返されたため、整地層に含まれていた瓦が地表面に出てきていたということが分かりました。



